

第6章

図書館の100年

そもそも、いつ、どのような形で理化学研究所の図書館はできたのだろうか。はっきりとした記録は残されていない。しかし、1921（大正10）年11月28日の主任研究員会の決議事項の一つとして、「図書購入ならびに管理法に関しては、一種一部のみは図書室外に持ち出さざることを原則として、各研究室より委員を選出して、その手続き方法を協議すること」と記された文書が残っており、少なくともこの時点で、小規模の図書室が存在していたことが分かる。

創立から4年、大河内正敏の所長就任を契機に、財団理研は、規約や組織も本格的に整備されていった。上の決議もその一環である。基本となる物品、図書、工作の購入法や管理の仕方から検討が始まった。同月30日に、各特別委員会ができて、委員が決められたという記録も残っている。そしてこの約1カ月後の1922年1月から、理研の最大の特徴である主任研究員制度が、正式にスタートしたのである。

理研図書館があった駒込2号館は、太平洋戦争末期に空襲を受けて一部が焼け落ちた。しかし蔵書は奇跡的にも焼失を逃れ、無事に創立百周年を迎えることができた。しかし、戦火にも負けなかった資料や図書館も、電子ジャーナルの時代となり、その役割を大きく減少させている。それでも100年後、電子化された資料が確実に読めるという保証はなく、また温故知新で古い時代の論文が再評価されることなどを想定すれば、印刷物としての資料の価値は、決して下がることはないと思われる。

理研図書館が所蔵するニュートンの『プリンキピア』や『光学』などの稀覯本は、さまざまな研究者の手をたどってきたものである。数百年という時の経過を無言のうちに語っており、次の世代の研究者に勇気を与えてくれるのかもしれない。

第1節 論文誌中心の理研図書館

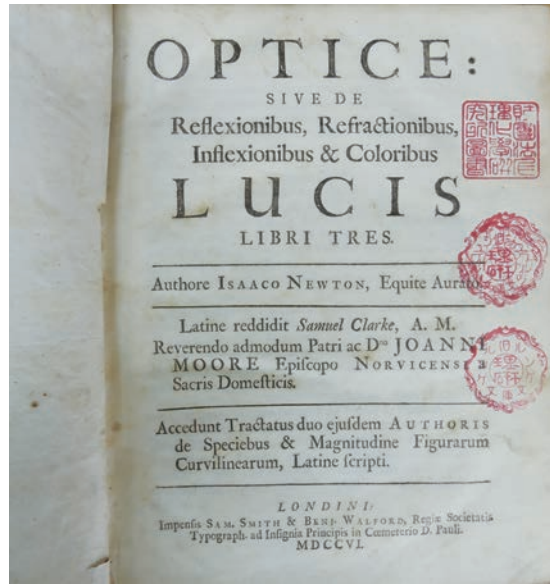
始まりは1号館の図書室

理研図書館の始まりは、駒込の1号館（化学系の建物）の1階にあった約20m²（約6坪）の小部屋である。その後、2号館（物理学系の建物）の建設で図書室はその3階に移り、面積も約500m²（約150坪）に拡張された。さらに、期日は特定できないがスペースは拡大し、和光移転までには、2階の一部も占有していた。

理研図書館の蔵書のほとんどは論文雑誌である。もちろん単行本もあるが、雑誌に近いかたちのシリーズものが多い。特に1930年代の雑誌が豊富にある。



『プリンキピア』（左から3冊）、『光学』（左から4冊目）



『旧ルンゲ文庫』の印が押された『光学』の本扉

Nature (1869年創刊) は創刊号から今に至るまで所蔵されている。そのほか、有名な *Berichte der Deutschen Chemischen Gesellschaft* (1868年-) や *Liebigs Annalen* (1832年-) や *Beilstein Handbuch der Organischen Chemie* (1881年-) など、貴重な雑誌も収蔵されている。

雑誌も含めて、理研の蔵書の特徴づけているものに、ルンゲ文庫とシュワルツ文庫がある。ニュートンの『プリンキピア』（*Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica*）と『光学』（*Optice*）は、初版本ではないが、ともに1700年代のリプリント版であり、本扉には「旧ルンゲ文庫」の印が押されている。歴史的にも十分に貴重な書籍である（第2節 シュワルツ文庫とルンゲ文庫を参照）。

これらも含めて、現在理研図書館に収蔵されている稀覯本の多くは、多くの人々に読まれたためか、表紙などがかなり傷んでいる。大事な宝物として守られてきたというよりは、徹底的に読み込まれ、使い尽くされてきた本が多いのである。こんなところにも「科学者の自由な楽園」の名残りが感じられる。

そもそも理研は、独創的な研究、世界の最先端の研究、オンリーワンの研究を目指して設立された。一番を目指して、図書館もまた研究の支援機能の一端として設置された。研究、研究者のための最重要な資料が論文誌であることは、現在ではかなり知られているが、それを大正時代からすでに徹底していたのが、理研図書館だったのである。雑誌に論文を載せること、最新の雑誌から研究動向を知ることが、研究者にとって最重要な課題であった。

1922年に『理研彙報』が創刊

理研図書館が論文誌を購入するのと呼応するように、1922（大正11）年4月には欧文の *Scientific Papers of the Institute of Physical and Chemical Research* が、また6月には和文の『理化学研究所彙報』が、それぞれ理研から創刊されている。特に欧文の“*Scientific Papers*”は、理研および日本の成果を世界に向け

て発信するための手段であった。

財団理研の時代から戦後の第一次科研（-1955年）までは、『理研彙報』を発行していた編纂係と図書係は組織上、明確に分かれていた。特殊法人時代（1959年-）は、図書室は副理事長の直下にあったが、1967（昭和42）年に編纂課が一緒になって、「図書・発表課」となった。図書室には冷暖房がなく、冬は大きなストーブを置いて暖をとった。しかし、寒い冬は寒すぎ、暑い夏は暑すぎて、ほとんど仕事にならなかったという声が残されている。

和雑誌に関しては、他機関発行の雑誌を無料で入手する雑誌交換という仕組みがあり、8割方はこの方法で入手していた。学位論文も雑誌交換で入手できた。しかし著名な欧文誌についてはそうはいかず、正規に購入した。雑誌の入手に関するちょっとしたエピソードがある。チェルノブイリ原子力発電所の事故後、旧ソ連から来ていた学術雑誌が問題になり、理研内の専門家をお願いしてガイガー測定器で測ってもらったことがあるという（結果は何も問題なかった）。

なぜ疎開しなかったのか？

時計を巻き戻す。1945年4月の空襲で、理研は3分の2の建物が焼け落ちるといふ大きな被害を受けた。図書室のあった2号館も、講堂をはじめ複数の部屋が被害にあったものの、不思議なことに図書室に関してはまったく被害が及ばなかったのである。これはまさに奇跡であった。

理研図書室が燃えなかったのは、もちろん、まったくの偶然である。理研内でも蔵書の疎開は意識されていたと思われるが、疎開できない理由があった。研究機関として理研が機能している限り、論文類は常にそばに置いて参照しなければならない必需品だったからだ。1943年の住木諭介助教授（後に理研副理事長）のエピソードが、ある意味、そのことを物語っている。日本軍からの要請で、太平洋の孤島に展開した軍隊に真水を補給するために、海水の脱塩法に取り組んだ話である。理研図書室の*Beilstein Handbuch der Organischen Chemie*を徹底的に調べた結果、ジオキシマレイン酸がナトリウムと難溶性の塩を作ることを突き止めたのであった。

和光への引っ越し

理研図書室の蔵書は、1966年に駒込から現在地の埼玉県和光市に移転を開始した。移転当初は図書館として独立した建物はなかったために仮住まいとなり、1972年11月30日に鉄筋コンクリート2階建、延面積1855m²（562坪）の現在の図書館が完成した。利用開始は1973年3月5日からである。

図書館にとって、引っ越しは大仕事である。理研図書館は、駒込の図書室から現在の図書館まで、2回の引っ越しが行われている。1回目は駒込から研究本館1階の旧電子計算機室（仮住まい）へ、2回目はこの仮住まいから現在の図書館までの引っ越しである。

この引っ越しを仕切ったのが図書・発表課の遊佐守である。実際の引っ越しは日本通運に頼んだが、どの雑誌をどこに運び入れるのか、それを指示する必要が



図書館1階 カウンター、新聞・雑誌架、検索用端末等がある。



稀観本書架前にて、『光学』を手にする
記念史料室富田悟

あった。そのために遊佐は、移動後の配架位置を詳細に作図して、その作図に基づいて移動作業を進めるという方法論を編み出した。実際の書架を採寸し、引越後後に増加する雑誌の厚みも加算して資料の配置を決めていったのである。少し具体的に紹介しよう。

書架の一段は90cm、奥行き20cmである。したがって書架一連は90cm×6段=540cm。一列は11連なので、540cm×11連=5940cmとなる。仮に*Nature*が書架一列に収納されているとすると、*Nature*の現在の所蔵量（厚みの合計）は5940cmである。週刊の*Nature*は、引越後後も1年に約50cmずつ増えていくことになる。

これを、方眼紙に作図して、番号を振っていく。次に、同じ番号を書架にも振る。また、実際の*Nature*の本体にも荷札に番号を書き込んで、ひとまとめにするのである。このような作業を引越前に終わらせ、当日は日本通運にそれを渡して指示したのである。駒込から和光への引越しの期間、遊佐はこの作業にかかりっきりとなって、わが子の誕生に立ち会えなかった。

2回目の仮住まいの電子計算機室から新築の図書館への移動は、この一連の作業に、蔵書の搬出後に、スチール書架を解体して新図書館に運び、再び組み立てる工程が加わった。

これは理研オリジナルの方法で、その後、和光の図書館において、所蔵雑誌が増えて書架の置き場所が詰まってきたとき、同様のやり方で配置換えが行われた。この理研方式のノウハウは日本通運にも伝わっているはずと遊佐は考えている。

なお、移転に関して研究者から寄せられた最も重要な要求は、新刊雑誌の閲覧できない期間をできるだけ短くしてほしいということだった。図書館全体の移転期間は3週間であったが、工夫を重ねて新刊雑誌が閲覧できない期間を1週間に縮めたのである。

また、新図書館に対して個室がほしいという要望もあったが、その代替案とし



電動書架が並ぶ地階
雑誌のバックナンバーの多くは製本されている。

て、明かり取り窓や閲覧机が配置された。また、1階の書庫部分は現役雑誌スペースと新刊雑誌展示スペース、閲覧室、受付として、地階には雑誌のバックナンバーを中心に収納する設計となった。

複写機が図書館を変えた

1941年ごろ、理研創立25年を記念して製作された「科学の殿堂」（理研映画社）には、図書館の光景が二つ描き出されている。一つは、芯をとがらせた鉛筆をひとまとめ用意して、論文をひたすらノートに書き写す研究者の姿である。もう一つは、木製のはしごを書架に立てかけて、天井付近の蔵書を取り出す研究者の姿である。

複写機のなかった時代、研究者は必要な論文は図書館で筆写することが多かった。手間はかかったが、それによる深い理解という副産物があった。1975年以降、写真コピーを提供した時代があり、研究者に重宝がられた。これは、筆記しにくい表やデータの部分だけを、写真の複写で提供するというやり方だった。

しかし、複写機が普及する時代となり、図書館の役割や運営の仕方も大きく変わるようになった。筆写という作業が消え、図書館に滞在する研究者の人数・時間の数量が激減した。

図書館の資料費は、当初は図書経費でまかなってきたが、購入金額の増大に伴い、受益者負担、つまり研究室の希望数に応じて按分負担するようになった。その後、この受益者負担をやめて、間接経費や図書館の予算でまかなうことになった。

また、複写機を研究室で設置することが可能な時代となり、図書館の複写機（モノクロ4台、カラー1台）に対する研究室の受益者負担も廃止となった。そのため、図書館に入っていた経費がなくなり、図書館の裁量で買えた参考図書類の購入ができなくなった。

組織としても、工作係と同様、組織的放浪を重ねているように見える。すでに述べたように、財団理研は図書係（1922年-）、第1次科研、第2次科研は図書課

(1951年-)、第3次科研は図書係(1958年)であった。

そして特殊法人以降の変遷を記すと、副理事長直下の調整室図書課(1958年10月)→図書室(1959年4月)→研究事務部図書課(1964年4月)→研究事務部図書課図書係(1965年5月)→普及部図書・発表課(1967年4月)→企画部図書・発表課(1982年4月)→研究業務部図書・発表課(1984年4月)→研究業務部研究調整課／情報環境施設(兼)(1996年4月)→情報環境室(1998年4月)→研究調整部研究交流課(2002年4月)→情報基盤センター総括ユニット(2006年4月)→情報システム部情報化戦略・基盤課(2007年4月-)と変わってきた。

電子媒体への転換

かつての図書館は、19世紀や1900年代前半の文献を読む研究者も多かった。また*Chemical Abstract*がまだ分厚い雑誌の時代であり、抄録を調べに来る研究者も多かった。その一方で、個性的な研究者が静かな環境を求めて図書館を訪れることが多かった。

独立行政法人時代に入り、論文誌は電子ジャーナルの時代を迎えた。これは図書館にとっては大革命であった。研究者は自分の居室でジャーナルを閲覧できる



図書館担当者の回想

木村郁子は宮島龍興理事長時代の1981(昭和56)年に理研に途中入所した。一方、遊佐守は長岡治男理事長の1963(昭和38)年の入所である。

まず木村の回想。彼女が入ったときの最古参は坂口イサ子(故人)で、長岡半太郎博士と直にお会いしたことがあったという。その坂口から聞いた話では、当時の研究者は良家の子息が多く、肺結核を病んでいる人もいたらしい。だから、理研の古い雑誌には、彼らの密やかな溜息とともに結核菌もはさまれていると噂かされたという。

遊佐の思い出は朝永振一郎博士だ。ある土曜日、守衛所から図書館に連絡があり、「川端康成に似た人が、図書館に行きたいと言っている」とのことであった。「ああ、朝永振一郎先生だとぴんときまして、すぐにお迎えにうかがいました」当時の朝永博士は『物理学とは何だろうか』(岩波新書)を執筆中だった。そのために、『理研彙報』に掲載された自らの論文を再読する必要があり、和光の図書館に来られたのである。「数日して、もう一度お見えになりました。お召しになっていたスーツが大変に仕立ての良いもので、おしゃれな方だなと思いました」と遊佐は述懐する。それから数年して、朝永博士はお亡くなりになった。

木村の記憶に、外部利用者の思い出がある。特に向かいの本田技術研究所の研究者から、工学関係の文献コピーの請求が多くあった時期があるという。また生物系の文献コピーもあって不思議に感じた。しかしそれが、後年のアシモ(ロボット)の開発の一助になったのかもしれないと想像を広げる。

ようになり、図書館を訪れる人が激減した。

電子ジャーナルの普及が始まったのは2000年前後である。しかし、理研図書館は、すぐに導入するのではなく、様子を見ることになった。これには当時の田村富穂図書・発表課長の意見を反映していた。電子ジャーナルの購読を取りやめた場合、購読期間を過ぎても従来の紙媒体であれば手元に残るバックナンバーが、電子ジャーナルでは閲覧できなくなる危険性があったのである。

電子ジャーナルの購読費用は、当初は年間1億円程度であった。しかし組織の膨張に伴い、七つの事業所等全てで電子ジャーナルを閲覧できるようにするため、マルチサイト購読契約となって、費用は約4倍に膨らんだ。当然、予算確保に苦慮することになった。

図書館の役割は、いまや、いかにIT環境を整えるかという方向に推移している。つまり、図書館資料=情報という変化がより著しくなっている。このような考え方は、理研の図書館が創設されたときに、論文雑誌中心に文献を収集・購入したことと軌を一にしており、世界と競争している研究者にとっては、より快適な環境になったことを意味する。ただ、「紙媒体になじんだ古い時代を経験している図書館員には、少し寂しいものがあります」と木村は言う。図書館で静かに調べ物をする研究者の姿は、100年の時を超えて、かつての研究員の姿をほうふつとさせる。

第2節 シュワルツ文庫とルンゲ文庫

シュワルツとルンゲ

理研図書館には、稀覯本を含む貴重な欧文の古典的書籍が多数所蔵されている。古書として高価な初版本は多くないようだが、研究者が手に取れる古典が身近にあることは、研究者に有形無形の力を与えてくれたに違いない。

これらの中に、旧シュワルツ文庫あるいは旧ルンゲ文庫と印の押されたものが多数ある。旧シュワルツ文庫は662冊、旧ルンゲ文庫は372冊が所蔵されている。例えばニュートンの『プリンキピア』は1760年のリプリント版（初版は1687年）が、『光学』は1730年のリプリント版（初版は1706年）があり、いずれも旧ルンゲ文庫である。

ところで、ルンゲとシュワルツとはいかなる人物なのか。調べてみると、意外にも二人はかなり近いところにいた研究者同士であった。

ルンゲ（Carl David Tolme Runge：1856-1927）はドイツの数学者、物理学者、分光学者である。数値解析（ルンゲ=クッタ法）や月面クレーターにその名を残している。特に、スペクトル系列とボーアの原子模型とを結びつける分光学的研究が有名である。1880年にベルリン大学で数学の博士号を取得、1883年に同大学講師。1886年にハノーファー高等専門学校教授。1904（明治37）年、クラインの壺で有名なクライン（Felix C. Klein）に招かれてゲッチンゲン大学教授に就任した。そこにはすでに、現代数学の父とされる高名なヒルベルト

(David Hilbert) がいて、数学の一大拠点となっていた。

一方、一回り年長のシュワルツ (Karl Hermann Amandus Schwarz : 1843-1921) はドイツの数学者で、複素解析に関する業績で知られる。コーシー・シュワルツの不等式、シュワルツ極小曲面などにその名を残している。ベルリン工科大学で化学を学び始めたが、クンマー (E. E. Kummer) とワイエルシュトラス (K. T. W. Weierstrass) の影響を受けて数学に転向した。ワイエルシュトラスの指導のもと、1864年にベルリン大学で博士号を取得した。1867年にハレ大学で教授資格を得て、1869年からスイス連邦工科大学の数学教授、1875年にゲッチンゲン大学の数学の主任教授となった。そして1892年にベルリン大学に教授として転出した。

当時のドイツの数学界は、No.1のベルリン大学に対してNo.2のゲッチンゲン大学が肉薄していた (日本で言えば、東京大学と京都大学のような関係に似ていた)。1902年、シュワルツらは著名なヒルベルトに、ベルリン大学の教授に就任するよう打診したが断られた。このとき、ルンゲもゲッチンゲン大学にいた。引き抜きの話に乗らずにヒルベルトが残ったことで、その後、ゲッチンゲン大学がドイツ数学のトップとなったのである。

すでに述べたように、ルンゲとシュワルツは、ともにゲッチンゲンで研究生活を送ったことがあり、ルンゲ文庫にもシュワルツ文庫にも、ゲッチンゲンで製本された書籍がかなりたくさん見られる。しかし二人が一緒にゲッチンゲンにいた期間はない。その後の二人の蔵書がどのように日本に渡ってきたかは明らかではない。ただし、第一次世界大戦後のドイツの混乱とインフレが無関係ではないと思われる。経緯は不明だが、ともかくドイツを離れた二人の数学者の蔵書が日本に届き、理研図書館の書庫の中で、一緒に並べられることになったのである。

シュワルツ文庫は購入、ルンゲ文庫は寄贈

理研が二つの文庫を購入することは、1927 (昭和2) 年5月20日の研究員総会で決まった。議事録には次のように書かれている。

- 決算に関する件

大河内所長より大正十五年度決算につき詳細なる説明あり。本年度は経済状態良好なりしをもって、研究室の不足額は特に来年度に繰り越さざることによる旨、報告。なお出版物の印刷費、売上等につき報告。一同承認。

- 図書主任及び図書に関する件

図書室は近来、非常に多忙となり、かつ整理を要するもの少なからざるをもって、適当なる主任者を物色中なること、数学の大家シュワルツ氏の文庫 (約二万三千元) および物理学の大家ルンゲ氏の文庫 (九千元) を購入することに決定したること、ただしシュワルツ文庫はビタミンAの繰越金を流用し、ルンゲ文庫は和田薫幸会の寄付を仰ぎ購入すること。将来、当所の図書室は、科学図書館となしたき希望あることにつき報告。

この時期は、財団理研の経営が軌道に乗ったところである。最大の貢献がビタミンAの製造販売で、理研を大きく潤した。研究費の赤字も来年度に繰り越しせずに支払うし、さらにシュワルツ文庫の購入という、図書館の整備もなされたのである。その一方で、ルンゲ文庫は和田薫幸会の寄付で購入するとされている。当時は、研究員総会（会議）での決定は、その後、評議会で報告・了承されることになっており、実際、6月15日の理事会後に開かれた定期評議会で、「(ハ) 和田薫幸会より独逸ルンゲ文庫（価額九千円）の寄付を受けたること」が報告されている。

ということは、あるいは、ルンゲ文庫に関しては、和田薫幸会がすでに保有しており、それを理研に寄贈してくれるという話になったのかもしれない。というのは、和田薫幸会はすでに1924（大正13）年に、慶應義塾図書館にも459冊の外国図書を寄贈しているからである。

和田薫幸会は、財団理研の発足時の理事で評議員でもあった和田豊治の遺産をもとに作られた財団で、現在も活動を続けている。会長は和田豊治の孫にあたる石川清子で、本書に記載した「和田豊治日記」に関する情報は全て石川より提供されたものである。和田は、健康であれば渋沢栄一の後継者としてもっと大きな業績を日本の経済や社会に残したであろうと言われた逸材である。理研史において和田の足跡は忘れられつつあるが、特に、大河内正敏体制の誕生とルンゲ文庫の寄贈については、忘れてはいけない貢献である（次の二つのエピソード参照）。



誰が危機を救ったのか

1921（大正10）年、創立から4年を経過した理研では、物理部と化学部、特に長岡半太郎と櫻井錠二の感情的対立が表面化し、財政的問題もあって前途多難の様相を示していた。こうした中、理事の和田豊治は、渋沢栄一、大橋新太郎、荘清次郎と相談し、最終的には9月20日の理事会で、後から見ればきわめて重要な決定を下していた。それは、物理部と化学部の喧嘩終息、古市公威所長、櫻井錠二副所長の辞任、大河内正敏研究員の所長就任であった。

「和田豊治日記」によれば、新しい所長候補としては、東京帝大総長を退任したばかりの山川健次郎の名前が上がったが辞退され、大河内正敏を推挙したこと、それには原敬首相も賛同したこと、また化学部が「無謀の挙に出ざるよう」に、櫻井を経由して池田菊苗や鈴木梅太郎ら研究員を説得してもらったことが記されている。9月20日の理事会で決着したが、その前日まで、化学部の主要メンバーが理研をやめてしまう危機にあったのである。



ルンゲ文庫寄贈の由来

(財)和田薫幸会による寄贈に対して、当時の理研は感謝の意を表明した。その文書は、和田氏の写真とともに理研図書館内に展示し、また一部のルンゲ文庫書籍の表紙裏に添付した（一部、可読性を考慮して編集）。



この書冊は故ドイツの碩学カルル・ルンゲ博士の手沢本*にして、もって先生の高風を偲ぶに足る。さきに先生の没後その蔵書を挙げて我が図書館に収容するを得たるは、一つに財団法人和田薫幸会の美挙によるものにして、これ畢竟、故貴族院議員従五位勲三等和田豊治君の遺志を継承するに他ならず。

おもうに故人は、大正五年十月理研設立協議会において、つとに大隈首相より創立委員にぬきんでられ、同六年三月、理研設立の際、伏見総裁宮殿下より評議員および理事に御委嘱あり、爾來三期八カ年にわたり、大正十三年三月病没に至るまで、実業界の重鎮として縦横経営指導に寸暇なき身をもって、わが理研のため拮据盡瘁の誠をいたされ、あまつさえこの美挙を執行せしむるの志を遺さるるを憶えば、当所に関係ある者、だれかその遺徳を追懐せざらん。

ここに本書収蔵の由来を略記し、沿うるに故人の肖像をもってし、いささか記念の意を表するものなり。

昭和三年十月

財団法人理化学研究所

*手沢本=愛蔵本

第3節 レイリー卿の手紙

ルンゲとレイリー卿

ルンゲ文庫の1冊にかつて、*John William Strutt: Third Baron Rayleigh*という本があった。不思議なことに、ルンゲ文庫印の押された本扉のコピーが記念史料室に残されているにもかかわらず、書籍そのものは、かなり以前に理研図書館から逸失してしまった。この本は1924（大正13）年に発行されたもので、タイトルの人物は、物理や化学の学生なら誰でも知っているレイリー卿（1842-1919）である。卿はアルゴンの発見で1904（明治37）年にノーベル賞を受賞しているが、それ以上に、層流に関するレイリー数、地震の表面波であるレイリー波、波長変化を伴わないレイリー散乱などで広く知られており、あまりにも有名な物理学の巨人である。著者は息子（第4世レイリー卿）で、本書は父親が死んで数年後に出版された。

実はこの本に、1枚の手紙が挟み込まれていて、それは、1895年にレイリー卿がルンゲ教授に宛てたものであった。さらに、それとは別に、書かれた内容を日本語に翻訳した文書まで残されていた。そこには「55.1.9 曾田、田中両先生訳す」と記されている（曾田範宗、田中一範両博士の名前を想像させる）。以下に掲げる。

親愛なるルンゲ教授へ

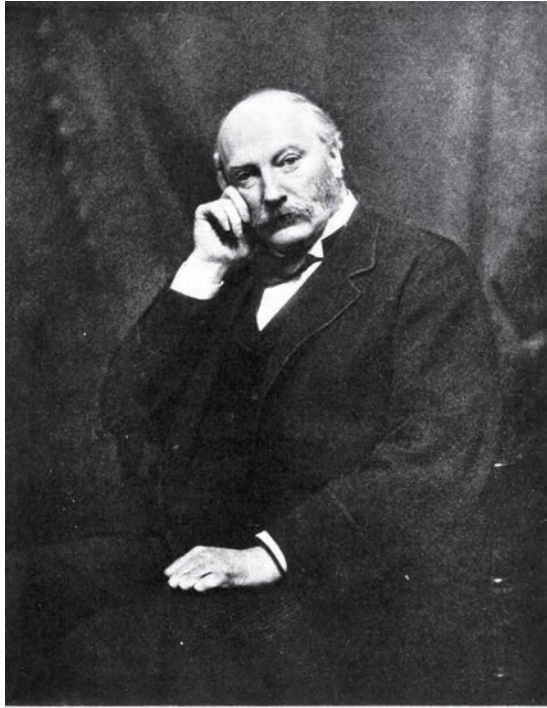
貴殿ならびにパッセン教授には、明日御来駕下さる由、誠に喜びにたえません。しかし、便利の点から申しますと、御指示の列車でハトフィールドパベルに御越し下さる方がよろしいかと存じます。駅には使いの者を派遣いたしましてお迎え申し上げます。

親愛なるレイリーより

レイリー卿は貴族（Lord）であり、1895年当時まだ43歳であったが、すでにケンブリッジ大学キャベンディッシュ研究所所長を辞していた。レイリー卿は、研究者としてのほとんどの期間を、故郷のエセックス州の領地（Terling Place）で過ごした（英国上流階級の田舎暮らしは普通のように、『種の起源』のダーウィンも同じような生活を送っている）。ということは、もしレイリー卿と議論がしたかったら、ロンドン東方約60kmの自宅を訪ねていかねばならなかった。

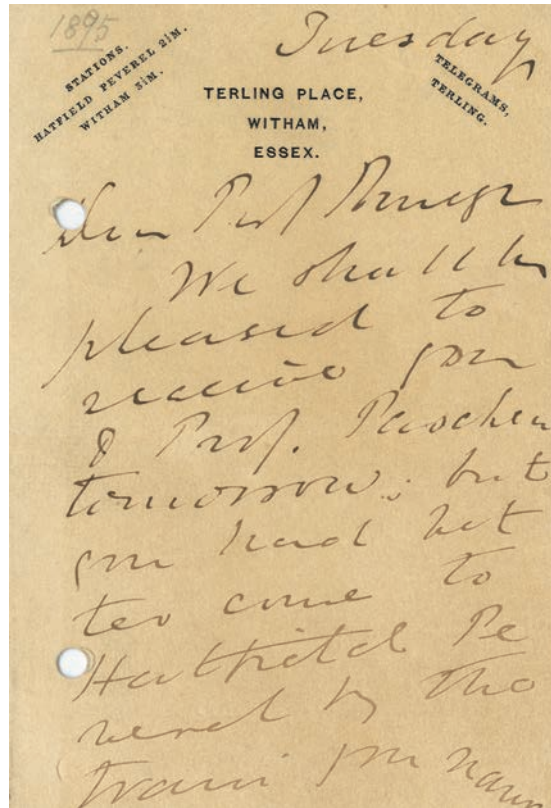
ルンゲ博士は当時39歳、ドイツのゲッチンゲン大学にいた。一緒に訪ねたパッセン（L. C. H. F. Paschen）博士は30歳でハノーバー大学にいた。ともに分光学についてレイリー卿と議論したかったに違いない（今日、パッセン-ルンゲ型の分光装置という名前が残っている）。第一次世界大戦勃発にはまだ少し時間があった。

ルンゲ、パッセン両博士はロンドンから列車で向かう計画を立て、その旨、手紙を送ったのだが、どうやら降りる駅が違ったらしい。レイリー卿に指示され



Rayleigh

ジョン・ウィリアム・ストラット（第3世レイリー卿）



レイリー卿がルンゲ教授に宛てた手紙

たハトフィールドパベル駅で降りると、使者が馬車で迎えてくれたのかもしれない。

レイリー卿の死後、息子の第四世が書いた本書は、ルンゲ博士のもとに届いた。それを手にした68歳のルンゲ博士は、約30年前にレイリー卿を訪ねたときにもらって大切に保管していた手紙を、本書に挟み込んで書棚に置いた。3年後にルンゲ博士も亡くなったが、その約30年後、本と手紙は、ルンゲ博士の他の蔵書とともに極東の理研の図書館にたどり着いたのである。